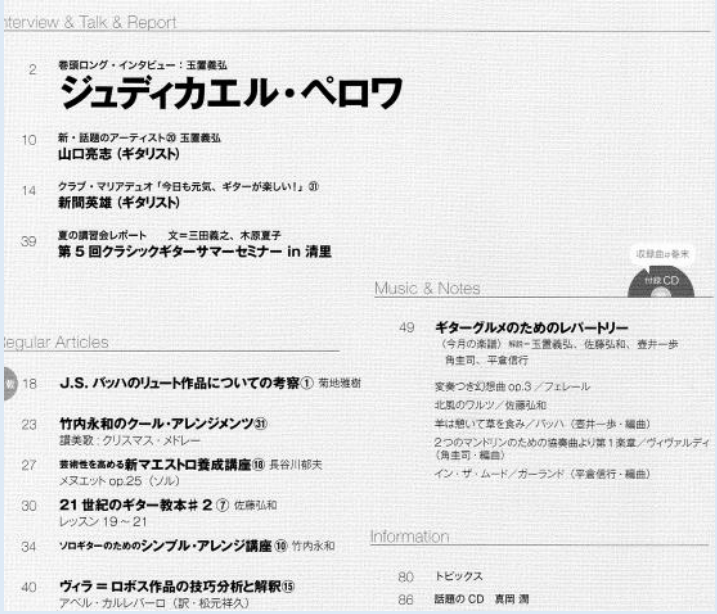
Guitar dream　NO.31(2011. 11)の紹介　by yakateru

表紙



メイン目次

【巻頭ロング・インタヴュー　抜粋・概要】　ジュディカエル・ペロア

私の中では一番憧れるギタリストです。強力な長い爪と、ぶっきらぼう的なスタイルで演奏する完璧なバッハ。彼を初めて知ったころ頃（コンサートを聴いた頃）のインタビュー記事です。

- 父が趣味でクラシックギターを弾いていたこともあり、7 歳の時にコンセルヴァトワールに通い始め、11 歳の時に協奏曲のソリストとしてコンサートをしました。子供の頃はまったく緊張しなかったけど、今はそれなりに緊張します。ただ、それで演奏がだめになることはないけどね。
- ペロア門下生からはコンクール優勝者が多いですね：最初の一番優秀な生徒は、ティボー・コーエンだった。コンクールでは、彼らの技量にとって余裕のある曲を選ぶようにしている。心から表現したい音楽を理想的な形で弾いてほしいから。
- 私たちは、40-50 歳の時にいい音楽が演奏できるようになることを目標とすべきだと思う。いや、40 歳ではまだ若すぎるかも。10 代でその核を作り上げるのは無理。スポーツとは違う。
- 素晴らしいテクニックの秘訣は？：これまで基礎練習をしたことは一度もない。生徒に教えるようになって困って、そこで生み出したのが「デジタル・テクニック」です。難しいところは、その曲のほんの一部です。そこだけを取り上げて、指や腕の動きを最大限丁寧に千回なぞる。千回は実際には不可能なので 40 回ぐらいでいい。動きを丁寧になぞる練習と、動きのコンビネーションをとてもゆっくりやります。また、生徒にもそう指導しています。簡単な練習曲を、遅い速度で練習を 1 か月ぐらいやると、あとのギターの習得はとても易しくなります。
- 影響を受けた演奏家は、リヒテル。彼の演奏は常に自発的で信じられない深みがある。いい加減な音が一音たりともない。しかも演奏に即興性がある。作曲家ごとに演奏をアダプトさせていて、違う表現内容を読み取り自分を適合させている様は名優のようだ。あとは、グレン・グールドかな。彼は絶対的な音楽の追求者だった。ギタリストでは、アサド兄弟がすばらしい。デュオでは、デュオ・メリス。パブロ・マルケスもも素晴らしい。
- 私たちは、いまだに自分たちの演奏している楽器のための音楽を把握しきれていないと思う。この時代になって問題は明らかになるばかりだ。これから、私たちは自分たちの手で、過去から現在までのレパートリーを自発的に発見・開拓していかなければならない。
- 趣味は、たくさんある。映画を見たり、新聞記事を切り抜いたり。現代や過去の歴史が見えてくる。

【（新）話題のアーティスト紹介　山口亮志】

イスラエルで生まれ、ギリシャ、メキシコなど世界中を動きながら育った経験を持つギタリストです。いろいろな活動の紹介が中心になっています。

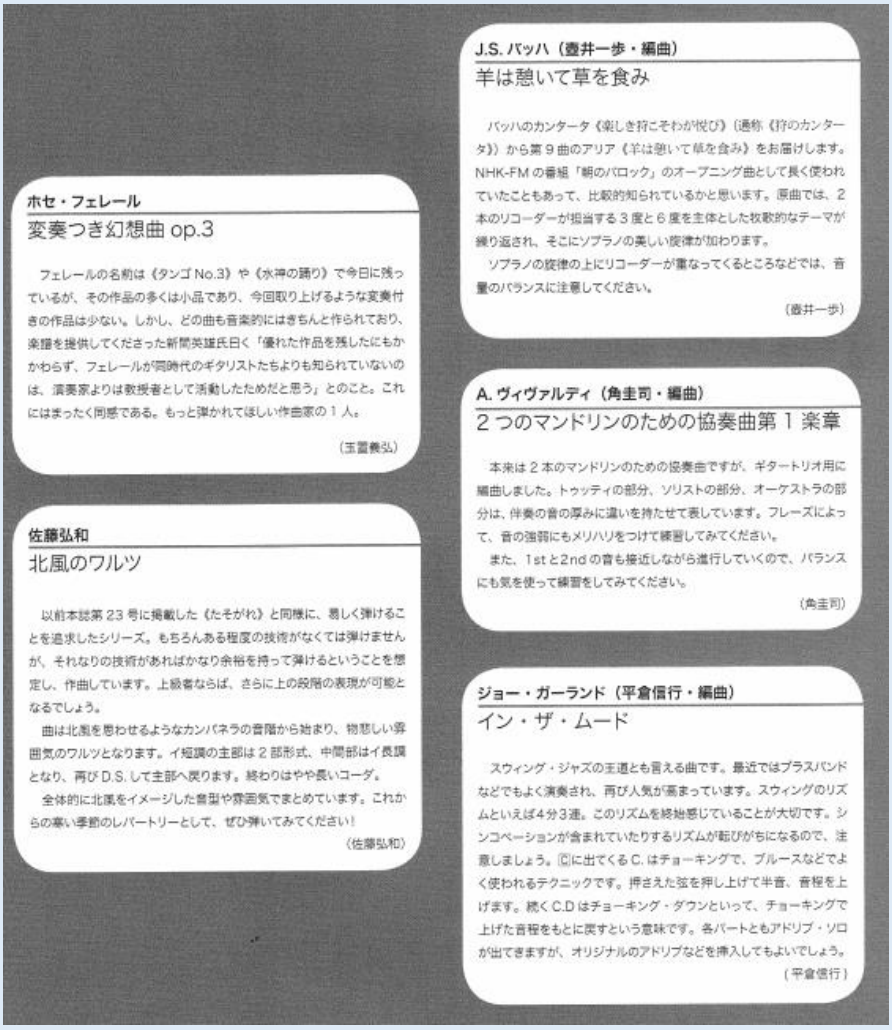
【クラブ・マリアデュオのインタビュー：新間英雄】

日本のラグタイムプレーヤのパイオニアとして知られているギタリストだそうです。新堀ギターやけん玉協会とは「正しいやり方があってそれ以外は認めない」という考え方で衝突したこともあるそうな。

【その他の注目すべき記事】

- 「新マエストロ養成講座：長谷川郁夫」：第 18 回は、ソルのメヌエット OP25 です。メヌエットとは、「小さい」というミニから出ているという説も紹介。女性の小さな歩幅のステップのことだそうで。
- 「21 世紀のギター教本＃２：佐藤弘和」：今回は、経過音、刺繍音の非和声音についての解説です。
- 「クール・アレンジメント：竹内永和」：今回は、季節柄ということで「クリスマス・メドレー」。
- 「ソロギターのためのシンプル・アレンジ講座：竹内永和」：メロディにコードを作ることの解説です。サンプル曲として、「オーラ・リー」が掲載されています。

「カルレバーロによるヴィラ・ロボス解説」等もあります。また、「J.S.バッハのリュート作品についての考察」というとても興味深い連載物が始まりました。これについても、また後日まとめて紹介したいと思います。多少、内容が持ち直してきている気配は感じられます。
また、Guitar dream には、楽譜と模範演奏 CD がついている。今回は、下の楽曲が掲載されている。



ホセ・フェレール
変奏つき幻想曲 op.3

フェレールの名前は《タンゴ No.3》や《水神の踊り》で今日に残っているが、その作品の多くは小品であり、今回取り上げるような変奏付きの作品は少ない。しかし、どの曲も音楽的にはきちんと作られており、楽譜を提供してくださった新間英雄氏曰く「優れた作品を残したにもかかわらず、フェレールが同時代のギタリストたちよりも知られていないのは、演奏家よりは教授者として活動したためだと思う」とのこと。これにはまったく同感である。もっと弾かれてほしい作曲家の１人。

（玉置義弘）

佐藤弘和
北風のワルツ

以前本誌第 23 号に掲載した《たそがれ》と同様に、易しく弾けることを追求したシリーズ。もちろんある程度の技術がなくては弾けませんが、それなりの技術があればかなり余裕を持って弾けるということを想定し、作曲しています。上級者ならば、さらに上の段階の表現が可能となるでしょう。

曲は北風を思わせるようなカンパネラの音階から始まり、物悲しい雰囲気のワルツとなります。イ短調の主部は 2 部形式、中間部はイ長調となり、再び D.S. して主部へ戻ります。終わりはやや長いコーダ。

全体的に北風をイメージした音型や雰囲気でまとめています。これからの寒い季節のレパートリーとして、ぜひ弾いてみてください！

（佐藤弘和）

J.S. バッハ（壷井一歩・編曲）
羊は憩いて草を食み

バッハのカンタータ《楽しき狩こそわが悦び》（通称《狩のカンタータ》）から第９曲のアリア《羊は憩いて草を食み》をお届けします。NHK-FM の番組「朝のバロック」のオープニング曲として長く使われていたこともあって、比較的知られているかと思います。原曲では、２本のリコーダーが担当する３度と６度を主体とした牧歌的なテーマが繰り返され、そこにソプラノの美しい旋律が加わります。

ソプラノの旋律の上にリコーダーが重なってくるところなどでは、音量のバランスに注意してください。

（壷井一歩）

A. ヴィヴァルディ（角圭司・編曲）
２つのマンドリンのための協奏曲第１楽章

本来は２本のマンドリンのための協奏曲ですが、ギタートリオ用に編曲しました。トゥッティの部分、ソリストの部分、オーケストラの部分は、伴奏の音の厚みに違いを持たせて表しています。フレーズによって、音の強弱にもメリハリをつけて練習してみてください。

また、1st と 2nd の音も接近しながら進行していくので、バランスにも気を使って練習をしてみてください。

（角圭司）

ジョー・ガーランド（平倉信行・編曲）
イン・ザ・ムード

スウィング・ジャズの王道とも言える曲です。最近ではブラスバンドなどでもよく演奏され、再び人気が高まっています。スウィングのリズムといえば4分3連。このリズムを終始感じていることが大切です。シンコペーションが含まれていたりするリズムが転びがちになるので、注意しましょう。Ⓒに出てくる C. はチョーキングで、ブルースなどでよく使われるテクニックです。押さえた弦を押し上げて半音、音程を上げます。続く C.D はチョーキング・ダウンといって、チョーキングで上げた音程をもとに戻すという意味です。各パートともアドリブ・ソロが出できますが、オリジナルのアドリブなどを挿入してもよいでしょう。

（平倉信行）